

## ODF 2000, Tokyo 報告

立野 公 男

((株)日立製作所中央研究所)

ODF (Optical Design & Fabrication) という国際学会は、光設計研究グループが、活動を日本国内に留めることなく、世界へ向けての情報発信の基地として活動の輪を広げようというグループ発足以来の長期的展望のもとに暖めてきた企画である。第1回目のODF '98, TokyoはIODC '98 (International Conference on Optical Design, Hawaii) のサテライトとして2日間のワークショップ形式で開催され、参加者133名(国内114名、海外19名)を得て成功をおさめた。光設計研究グループ内ではこの成功に自信をつけ、今度はサテライトでなく論文公募式の自立した本格的な国際学会として立ち上げようという気運が盛り上がった。そこへ、タイミングよくSPIE Japan Chapterから共催の申し出があり、Organizing Committee, International Program Committee, そして, Advisory Committeeが構成され、2年間の準備期間を経てメンバー全員の知恵と熱意によって11月15~17日に実現された。まずOSA, ICO, EOSには協賛(cooperation)の関係をプロポーズし、問題なく認可(approved)された。ここで特に、SPIEとの関係が問題となったが、ODF 2000組織委員長の伊藤良延氏、および、SPIE Japan Chapterの吉澤徹先生と谷田貝豊彦先生が交渉にあたられ、結局SPIEとOSJは後援組織(cosponsor)として広報をメインに支援いただくことになった。すなわち、ODF 2000運営の主体はあくまでも光設計研究グループとSPIE Japan Chapterにあり、両者のリーダーシップによって運営されるべきであることを皆で確認した。その結果、SPIEのいわゆるYellow Bookは出版しないことになり、結局、光設計研究グループ独自の装丁による360ページのODF 2000 Proceedingsができ上がった。またODFのAdvisory, すなわち、光設計研究グループの発案者でかつ、現在Optical Reviewの編集委員長でもある一岡芳樹先生からは、優秀な発表論文は選考のうえODF 2000特集号としてOptical Reviewから出版するべきとの

提案がなされ、現在進行中である。また、早稲田大学での国際会議場の設定においては大頭仁先生のお力添えをいただいた。

ODFのスコープは日本が世界をリードしている分野、すなわち結像光学、光導波路、回折光学、光学システム、光通信、光記録などの光設計と加工技術をカバーする。また、今回は特に光学設計シミュレーションと光リソグラフィーの2つのシンポジウムを設けてプログラムの充実を図った。トータルの発表論文件数は87件であり、内訳は2件の基調講演、17件の招待講演、13件のシンポジウム講演、24件の口頭論文、そして2件のPD(post deadline paper)を含む31件のポスター論文である。投稿論文の数は68件であり6件がリジェクトされた結果、論文採択率は88%であった。プログラムの詳細をお知りになりたい方々にはproceedingsを頒布いたしますので下記宛てにお申し込みください(芝山敦史(株)ニコン、映像カンパニー第二開発部第三設計グループ、〒140-8601東京都品川区西大井1-6-3, E-mail: shibayama.a@nikon.co.jp)。

ODF 2000への参加登録者数は表に示すように14か国187名であり、うち海外参加者数が47名に達し、名実ともに本格的な国際会議が、日本において、光設計と加工技術の分野で実現した。今回の基調講演の1つはZeissのW. Ulrich氏にお願いしたが、これまで開示されなかった光リソグラフィー用のレンズ設計に関して相当オープンに内容が発表された。これは機密保持路線でなく、むしろ顧客に長期計画を開示してその信用を得ようとする方針に変えていると指摘される先達もおられた。また、今回は全投稿論文の中から最もすぐれた論文がBest Paper Awardとして選考され、General Chairの鶴田匡夫氏により贈呈された。選考委員会は主にプログラム委員によって構成されたインターナショナルなものとし、アメリカ、ロシア、スウェーデンの方々に参加いただき、最終日の昼食時に行われた。ここで国内委員より国内外1件ずつに贈呈してはど



Country	Paper	Participant
Australia	1	1
China	2	0
Denmark	1	1
Finland	0	1
France	2	2
Germany	5	6
Israel	2	3
Japan	46	140
Korea	4	10
Mexico	1	0
The Netherlands	4	4
Portugal	1	1
Russia	3	1
Singapore	1	0
Sweden	1	1
Taiwan	2	1
USA	11	15
Total	87	187

うかという意見が出されたが、海外の選考委員より「ODFは十分国際的な学会であるから内外を区別する必要はない。むしろカテゴリーごとに Best Paper を選出して公表し、その中からさらに優秀な論文を選ぶべきである」という合理的かつ建設的な意見が出され、主催者側としても満足できたことは特筆に値する。選ばれた論文は I. Kasai, T. Tanijiri, T. Endo and H. Ueda (Minolta) “Actually wearable see-through display using HOE” であった。

一方、プログラムと同じウエイトで国際交流の場作りを工夫した。まず、参加者に期間中のなるべく早い時期からお互いの顔と名前を知っていただくためにレセプションを初日に行った。ここでは、この日のために練習を積んできた“ODF Singers”が日本民謡を披露し拍手喝采を浴び、国際的な心の交流を増幅した。今後とも“ODF Singers”

の知的で真摯なハーモニーは ODF 開催にとってなくてはならない催しとなるであろう。また、最終日には ODF の将来を考えて、終了後の打ち上げをインターナショナルに行った。すなわち、国内の実行委員全員がホストとなって、海外の招待講演者やプログラム委員をワインパーティーに招いた。そしてちょうど解禁となった今年のボジョレーヌーボーのフレッシュな味わいを楽しみながら人脈作りを進めた。特に今回は、日本への入国にビザが必要な国からの参加者があり、その対応のために実行委員の 1 人が外務省まで出向いて手続きの方法を調べ、招待状を出してビザの発行を促進した経緯がある。この件はうまく展開し、参加者の方々から大いに感謝されたことは特筆すべきである。そして海外の招待講演者から、“When you exchange apples you'd get only one, but when you exchange your idea you'll have two ideas.”というバーナード・ショーの名言が引用され、“We have confirmed this time again that the international collaboration and competition are inevitable to make continuing progress in this field. See you again in Japan!”として ODF 2000 は締めくくられた。ODF は 2 年ごとの開催を目指している。今後も ODF のアイデンティティが失われることなくユニークな国際活動が続けられることを願い、ODF の海外開催も視野においた若手の活躍を期待している。最後に、誌数の制限で全員の名前を挙げられないのが誠に残念ですが、会場設定はじめ、予算、出版、広報、プログラムなど ODF 2000 の実現に労を惜しまれず、チームワークの大切さをここでも教えていただいた実行委員、プログラム委員、そして Advisory の各位、ならびにご支援いただいた日本光学会の皆様へ感謝申し上げ、ODF 2000 の開催報告とさせていただきます。(ODF 2000 プログラム委員長)